

英語を「身につける」?



江原 美明

もう10年以上も前、勤務していた高等学校のバレーボール部のコーチが、「子どもに自転車の乗りかたを教える方法」を伝授してくれた。まず、補助輪を片方だけ外し、しばらくその状態で子どもを自転車に乗らせる。慣れてくると、補助輪が地面から離れ、なんとなくバランスを取っている時間が長くなる。そこを見計らってもう片方の補助輪も外すのである。早速自分の子どもに試してみると、2,3日の公園通いで乗れるようになってしまった。

最初は片方の補助輪に頼りながら、次第にふらふらとバランスを取って走れるようになる様子を眺めていて、英語もこんな風に教えられないかナァと思ったものである。補助輪が乗る人のバランス感覚へと姿を変えるように、学校で教える文法や語彙などの知識を、英語によるコミュニケーション能力へと変化させ、英語を身につけさせるにはどうしたらよいかと。

そう思う反面、高校現場では諸般の事情から、理想と現実の狭間に立たされることになる。進学に必要な英語の知識や技能、論理的思考力を効率的に教えるには、「補助輪を片方はずしてふらふら走らせる」余裕などないと信じ込んだり、もともと「自転車に乗ること」自体に興味がない学生には、知識や技能の習得よりも、楽しさや動機付けを優先させたり、やはり知識や技能よりも人間教育や教養教育だろうと達観してみたり、常に悩みながら授業に臨んだ、というのが私の高校教師時代である。

だから、短大に入学してくる学生が、生き生きと英語を話す姿を見ると、その秘密が知りたくて仕方がない。学生を見ていると、文法的正確さや語彙力の差とは別の次元で、ちょうど、補助輪ありの自転車となし

の自転車では重心の使い方に決定的な違いがあるように、英語の話し方（書き方）にも決定的な境界線があるように思えるのだ。単なる流暢さではなく、それなりのレベルで自分の英語を身につけているという感覚である。そういう学生に秘密を聞いてみると、長期留学などの海外経験は別として、2つの要因があるように思う。1つは、高校時代スパルタ式に多読をさせられたというような、集中的に努力をした（させられた）経験、もう1つは、何らかのきっかけでshyな自分を乗り越え、笑われてもいいから積極的に話そうという勇気を持つに至った経験である。

英語を身につけるとは、知識や技能を習得する努力をしつつ、自分の現在の英語力を衣服のように文字通り身にまとい、自分をさらけ出す勇気を持つことなのだとなつくづく感じる。私自身、正確な英語を書く必要のある時は、辞書やコーパスのお世話になりながら「よそいき」の英語を必死に着込み、その他多くの場面では、相手の善意と協力を頼みに、「普段着」のテキトウな英語を身にまとう。定期的にやってくる自信喪失状態をちょっぴりの努力と開き直りでカバーしながら、英語の教員を続けている。

先日、日本語の堪能なカナダ人教員に“I really wish I were a perfect bilingual.”とボヤいたら、彼曰く“Nobody is a perfect *monolingual* in the first place.”との返事。あっ、そうだった。完璧な人間はいないんだ。完璧の呪縛から解放され、目的や場面に応じて、「よそいき」だけでなく心の通う「普段着」の英語を身につけられる授業をしなければ。すぐにお払い箱になる魔法の補助輪役を目指して。

(えはら よしあき・神奈川県立外語短期大学准教授)